山口県埋蔵文化財調査報告第140集

山ノ口遺跡

―― 平成２年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告 ――

1991
財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

序

本県では、恵まれた自然環境の中で豊かな地域社会の実現にむけて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。これら事業に伴う開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護するとともに、開発と文化財保護との調和のとれた県土作りを行うため財団法人山口県教育財団並びに山口県教育委員会では、発掘調査を実施しています。平成２年度に実施いたしました豊浦郡菊川町の山ノ口遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての集落跡が発見され、当時の生活や文化を知るうえで、数多くの貴重な資料を得ることができました。ここに、その調査結果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の文化財愛護への御理解に役立てていただき、さらに教育並びに学術研究の資料として、広く活用されることを願うものであります。

おわりに、発掘調査に実際に当り、御指導・御協力をいただきました関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成３年２月

財団法人山口県教育財団　理事長　高　山　　治

山口県教育委員会　　教育長　高　山　　治

例　言

1　本書は、県営圃場整備事業に先立ち、山口県農林部の委託を受けて財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成２年度に実施した豊浦郡菊川町所在の山ノ口遺跡の発掘調査報告である。

2　発掘調査の実施に当り、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、菊川町役場、菊川町教育委員会の協力を得た。また、地元の方々には発掘調査作業員としての参加等、大変お世話になった。

3　出土石材の鑑定については山口県立山口博物館専門学芸員　橋本　恭一氏から、出土石器の鑑定については山口大学埋蔵文化財資料館助手　河村　吉行氏から、掘立柱建物に関しては山口大学教授　木村　忠夫氏から貴重な助言・指導を受けた。以上関係各機関・各位に対し、記して謝意を表する。

4　調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団	(理事長	高山	治　)
	山口県教育委員会	(教育長	高山	治　)
事務局	財団法人山口県教育財団	(事務局長	田中	義人)
	山口県教育委員会文化課	(課長	山田	泰久)
	同	(係長	藤井	勝彦)
調査担当（総括）	山口県埋蔵文化財センター	(所長	山田	泰久)
	同	(次長	中村	徹也)
	同	(主任	乗安	和二三)
調査員	財団法人山口県教育財団事務局	指導主事	河名	達雄
	同		和田	嘉之
	同		鈴木	卓
	山口県埋蔵文化財センター	指導主事	岩崎	仁志

5　本書で使用した方位は国土座標で表示し、標高は海抜標高で示した。

6　本書で使用した遺構略号は次の通りである。

ＳＢ：竪穴住居・掘立柱建物，ＳＫ：土壙、ＳＤ：溝、ＳＰ：柱穴

7　本書で使用した地形図（第１図）は国土地理院発行の25,000分の１地形図「田部」・「川棚温泉」を使用したものである。

8　本書に収録した実測図・写真の作成および文章の執筆・編集は、中村の助言を得て調査員が分担した。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の概要……2
Ⅲ　遺構……5
　1．土壙……5
　2．竪穴住居……8
　3．溝……9
　4．掘立柱建物……9
　5．その他の遺構……10
Ⅳ　遺物……12
　1．弥生土器……12
　2．古代～中世の土器・陶磁器……12
　3．石器・石製品……14
　4．土製品……17
　5．その他の遺物……17
Ⅴ　まとめ……18

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　調査区設定図……2
第３図　遺構配置図……3
第４図　土壙実測図（１）……6
第５図　土壙実測図（２）……7
第６図　竪穴住居実測図……8
第７図　溝（ＳＤ01）実測図……10
第８図　掘立柱建物（ＳＢ03）実測図……11
第９図　遺物実測図（１）弥生土器……13
第10図　遺物実測図（２）須恵器・土師器・陶磁器……15
第11図　遺物実測図（３）翼状剥片……15
第12図　遺物実測図（４）石斧・石斧未製品……16
第13図　遺物実測図（５）石器・土製品……17

表　目　次

第１表　おもな土壙一覧表……5

図　版　目　次

図版第１　①遺跡遠景（北東から）、②遺跡全景
図版第２　土壙（１）①SK16～18　②SK19　③SK27～38　④SK29土器出土状況　⑤SK39～47　⑥SK45土器出土状況　SK50・51 SK49
図版第３　土壙（２）①SK54　②SK66　③SK60　④SK70　⑤SK81　⑥SK69　⑦SK69土器出土状況
図版第４　竪穴住居　①SB01・02全景(西から)　②SB01・02全景(北から)　③・④SB02土器出土状況
図版第５　溝（ＳＤ01）①東半部　②全景(北西から)　③・④礫群　⑤石斧出土状況
図版第６　遺物（１）
図版第７　遺物（２）
図版第８　遺物（３）

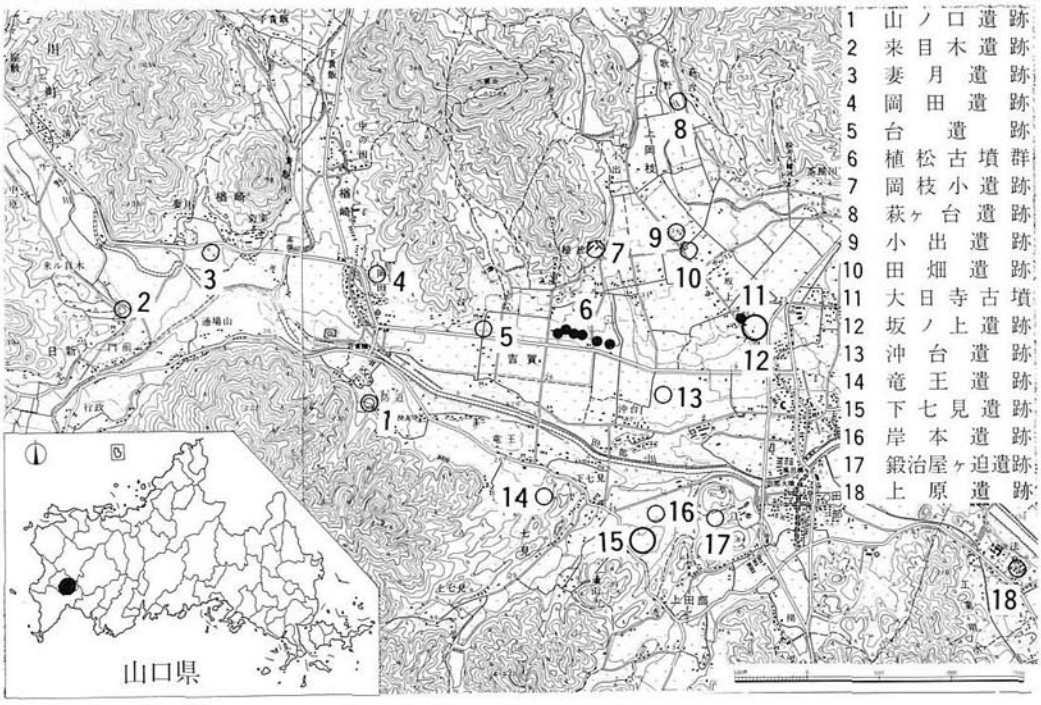
Ⅰ　遺跡の位置と環境

山ノ口遺跡は豊浦郡菊川町大字吉賀字山ノ口に所在する。

遺跡の位置する菊川町は山口県南西部の内陸の町であり、その中心に田部盆地がある。西の響灘から約13km、南の瀬戸内海から約７kmの位置にあるこの盆地は、２km四方ほどの広さをもち縁辺には扇状地・洪積台地が見られる。本遺跡は盆地南西部の北東に向けて張り出す台地上にあり、背後に六万坊山（796ｍ）が迫るために日照時間は比較的短い。遺跡は標高36～38ｍの緩斜面にあり、遺跡前面の田部川（木屋川支流）氾濫原からは８ｍほどの標高差がある。

田部盆地には多くの遺跡が確認されており、すでに発掘調査されているものも多い。弥生時代の上原遺跡・岸本遺跡・台遺跡、弥生～古墳時代の沖台遺跡、弥生～中世の下七見遺跡、弥生～近世の坂ノ上遺跡、古墳時代後期の植松古墳群、中世の萩ケ台遺跡・小出遺跡・田畑遺跡などがそれであり、先土器～縄文時代の遺跡は盆地内では発見されていない。田部盆地はその名が示すように田部（朝廷の領地を耕作する部民）が居住したと考えられており、古くから安定した穀倉地帯であったことがわかる。また本遺跡の東400ｍには6000余巻におよぶ明版一切経を蔵する快友寺があり、中世においてもこの地域に有力な勢力のあったことが知られる。

本遺跡の所在する地点は現在、響灘沿岸の下関市安岡地区・豊浦町中心部と瀬戸内海沿岸の下関市小月地区および内陸の菊川町中心部・豊浦町中心部を結ぶ交通路の分岐点であり、交通量も比較的多い。程度の差はあれ、古代・中世においても同様の状況であったことは想像に難くない。



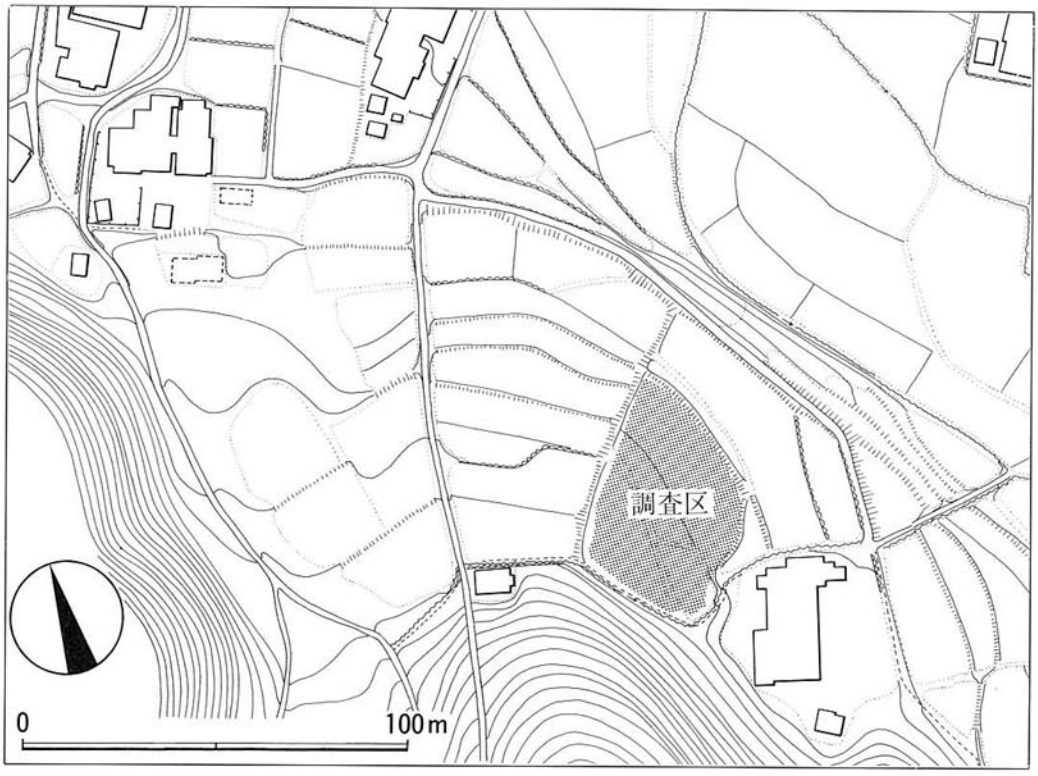
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　調査の概要

本遺跡は県営圃場整備事業施工予定地内に位置し、工事計画に先立って平成元年度に実施した埋蔵文化財包蔵地予察調査の試掘調査によって発見された。地表面観察では近世陶磁器がわずかに散布する程度であり、遺構の保存状態は良好であろうと推定された。

平成２年度に実施した本調査では、予察調査で遺物包含層と遺構の存在が確認された台地上面の平坦部に調査区を設定した（第２図参照）。調査区は南の山裾と北の台地縁との間の部分であり、全体として南から北に向かって傾斜していた。調査区の基本的な層序は、上層から耕作土・床土（盤土）・遺物包含層（黒褐色粘質土）・地山（橙褐色粘質土）であり、北にいくほど遺物包含層は厚く堆積していた。調査は重機による耕作土・床土除去、人力による遺物包含層除去・遺構検出ののち遺構掘り込みを行い、必要に応じて写真撮影・実測図作成を実施した。

遺構面は３段の平坦面を成していたが、これは調査開始時点の水田区画に一致しており、後世の改変によるものであることは明らかである。調査区の西部と北部中央は水田化に伴って遺構面を削平されており、一部は礫層が露出して湧水もみられた。遺構密度は東にいくほど高く、これは日照と湿気の面で台地端部が好条件を備えていたためであろう。



第２図　調査区設定図

Y=−107,120
Y=−107,110
Y=−107,100
Y=−107,090
X=−207,700
X=−207,710
X=−207,720
X=−207,730
X=−207,740
X=−207,750
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
SK48
SK49
SK50
SK51
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79
SK80
SK81
SK82
SK83
SK84
SK85
SK86
SK87
SK88
SK89
SK90
SP01
SP02
SP03
SP04
SP05
SP07
SP08
SB01
SB02
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
0
10m

第３図　遺構配置図

Ⅲ　遺　　構

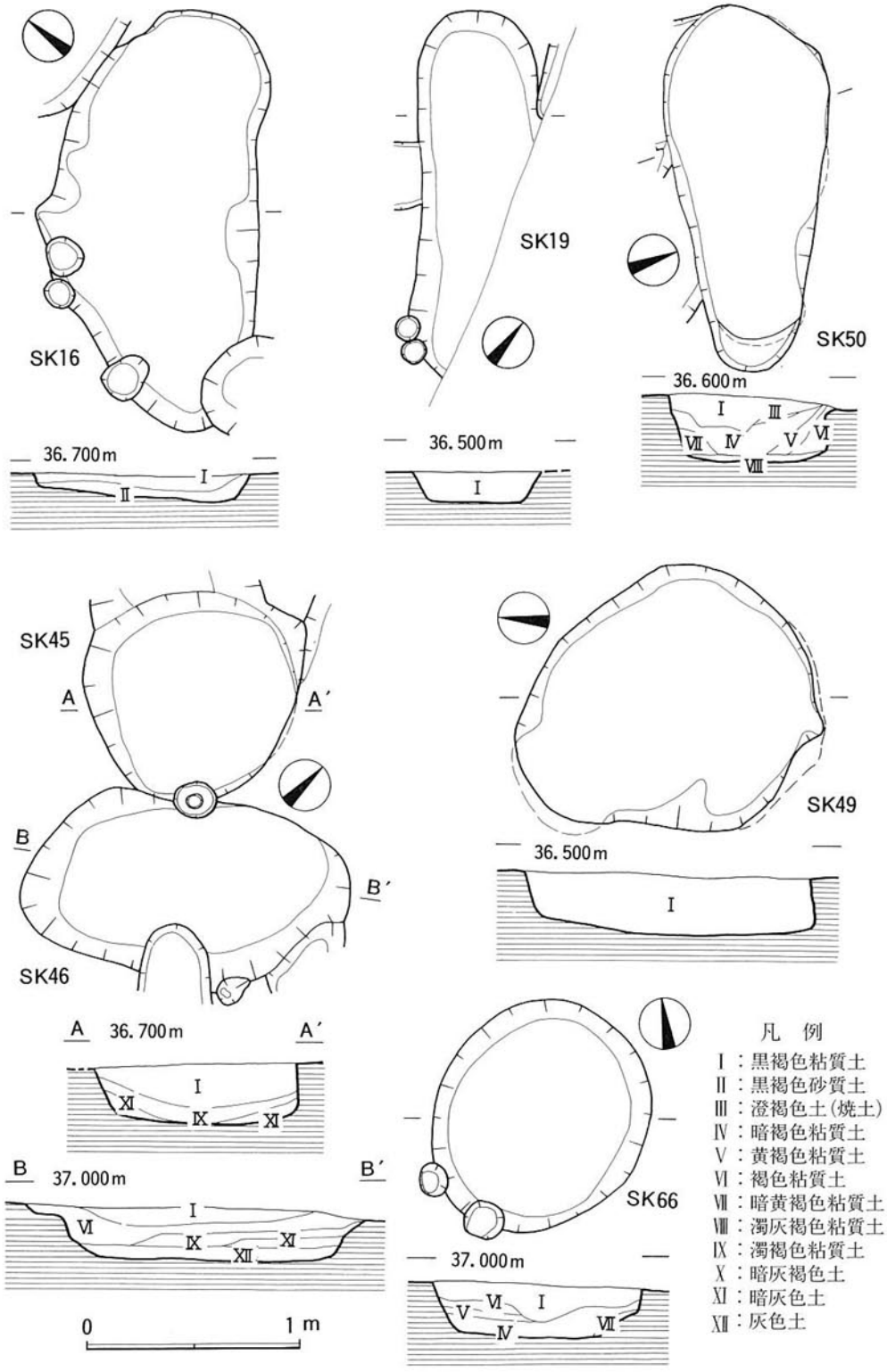
検出された遺構の所属時期は、弥生時代と中世に大きく分けられる。弥生時代の遺構は土壙・竪穴住居・溝・柱穴であり、中世の遺構は土壙・溝・掘立柱建物・柱穴である。これら遺構のうち、最も多いのは弥生時代の土壙と柱穴である。以下に主な遺構について概説する。

1．土壙（第４・５図、第１表）

土壙は90基検出された。弥生時代のものと中世のものがあり、前者が大半を占める。中世のものが散在するのに対して、弥生時代のものは重複することが多く、調査区東部に集中する傾向がみられる。断面形は弥生時代・中世とも浅いⅢ状のものがほとんどであるが、一般に弥生時代のものの方が深い。平面形では円形を基本とするが、長円形ないしは不整形のものがほとんどである。多くは投棄壙として利用されており、復元可能な土器を残す例はほとんどない。また、埋土中に焼土塊や焼土を含むものがあるが、壁面が焼けている例はない。中世の土壙は８基（ＳＫ02・05・61・70・72・76・79・82）のみであり、相対的に小規模なものが多い。なお、墓壙と考えられるものは含まれていない。

第１表　　おもな土壙一覧表

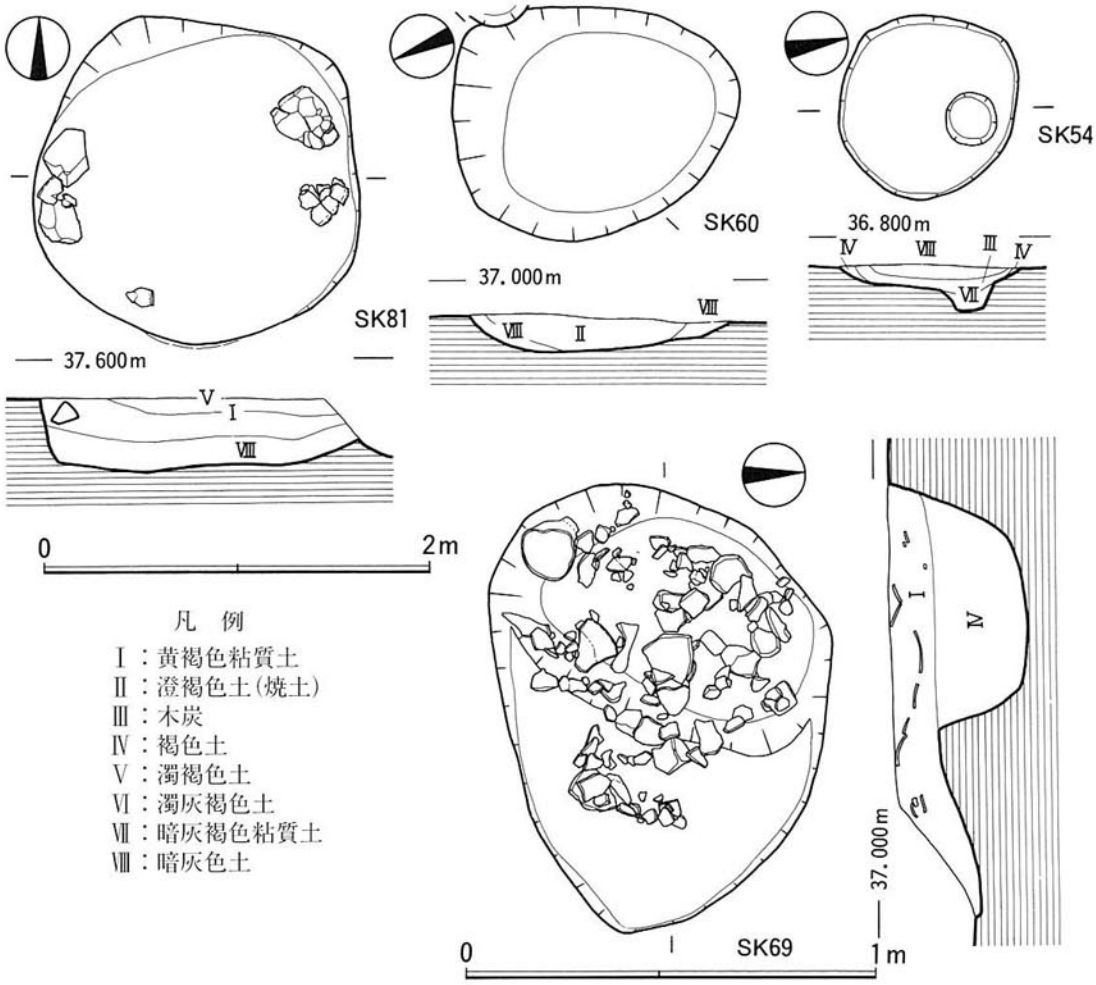
遺構番号	規模（cm）（　）は推定値			出土遺物														備考
	長軸	短軸	深さ	弥生土器	土師器	須恵器	陶磁器	瓦質土器	石蛤刃	石斧片刃	石斧未製品	石鏃	石包丁	石鎌	陶塁	焼土	その他	
SK16	408	215	27	○														弥生時代中期
SK17	343	(200)	15	○													翼状剝片	弥生時代前期
SK18	353	194	15	○					○									弥生時代前期
SK19	(350)	(120)	30	○														弥生時代中期
SK26	318	250	12	○					○									弥生時代前期
SK28	258	177	28	○								○						弥生時代前期
SK29	198	193	23	○							○					○		弥生時代前期
SK39	200	164	43	○													敲石	弥生時代前期
SK45	207	204	60	○						○								弥生時代前期
SK46	314	182	50	○					○			○			○		磨製石鏃	弥生時代前期
SK47	145	79	19	○							○		○				敲石・砥石	弥生時代前期
SK48	92	81	29							○								弥生時代前期
SK49	296	250	57	○						○	○			○			土錘	弥生時代中期
SK50	351	153	66	○					○									弥生時代前期
SK54	95	92	13	○														弥生時代前期
SK60	151	121	18	○												○		弥生時代前期
SK65	195	139	28	○							○							弥生時代（？）
SK66	231	198	54	○					○									弥生時代前期
SK69	117	88	36	○					○	○			○					弥生時代前期
SK70	151	123	14	○	○	○												中世（？）
SK72	(250)	(150)	39	○	○	○												中世
SK76	101	60	43				○	○										中世
SK79	108	53	12	○	○													中世
SK80	188	151	20	○														弥生時代前期
SK81	167	165	38	○														弥生時代前期
SK82	(220)	67	10		○			○										中世
SK88	(280)	?	33	○														弥生時代中期
SK89	94	60	24	○	○		○											弥生時代前期


SK16
36.700m
I
II
SK19
36.500m
I
SK50
36.600m
I
III
VII
IV
V
VI
VIII
SK45
A
A′
B
B′
SK46
A
36.700m
A′
I
XI
IX
XI
B
37.000m
B′
I
VI
IX
XI
XII
0
1 m
SK49
36.500m
I
SK66
37.000m
I
V
VI
IV
VII
凡　例
I：黒褐色粘質土
II：黒褐色砂質土
III：澄褐色土(焼土)
IV：暗褐色粘質土
V：黄褐色粘質土
VI：褐色粘質土
VII：暗黄褐色粘質土
VIII：濁灰褐色粘質土
IX：濁褐色粘質土
X：暗灰褐色土
XI：暗灰色土
XII：灰色土

第4図　土壙実測図（1）

第４・５図は代表的な弥生時代の土壙である。形態的には溝状の長いもの（ＳＫ16・19・46・50など）と円形に近いもの（ＳＫ45・49・54・60・66・69・81など）に大別できる。断面形については、壁面の一部が下方で広がるもの（ＳＫ45・49・50・81など）はみられるが、「袋状」と表現できるものはない。また、ＳＫ54以外には底面に柱穴状の小壙をもつものも見られない。土層断面については全体的に単層のもの（ＳＫ19・49など）が多く、特殊な堆積状況を示すものはみられないが、貯蔵用土壙と考えられるものの中には、ＳＫ45・81のように埋土中層に完形に近い土器が遺存するものがあり、数時にわたる利用が推定されるものを含んでいる。このほか、ＳＫ54・60のように木炭や焼土を多量に含む例もみられ、機能を異にする土壙が混在していると考えられる。

おもな土壙の詳細ついては第１表を参照されたい。



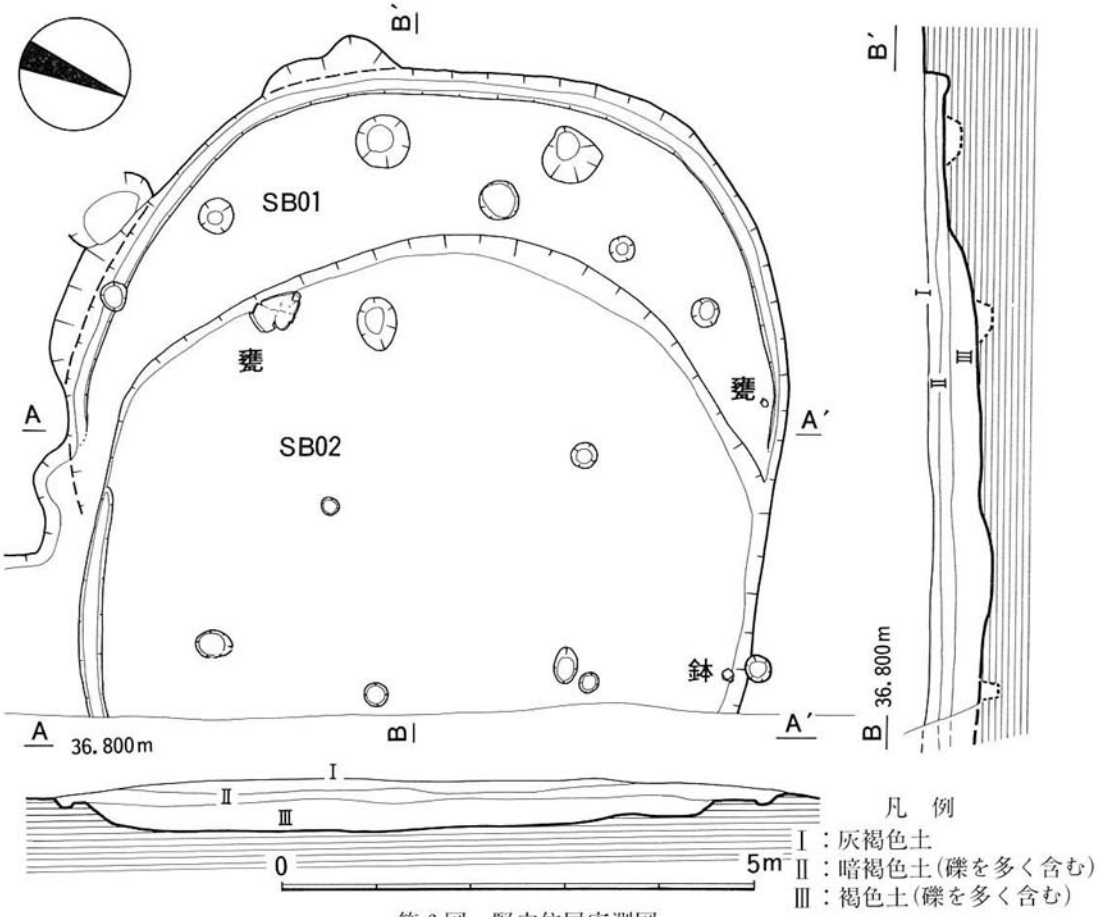
第５図　土壙実測図（2）

2．竪穴住居（第６図）

竪穴住居は２棟検出された。いずれも弥生時代後期前半に属すると考えられるが大きな時期差は想定できない。検出時点では両者の埋土は識別が困難であったが、土層観察の所見およびＳＢ02壁面沿いの土器が上半部を削り取られていることながら、ＳＢ01がＳＢ02を削平して営まれていることが確認できた。おそらくは建て替えによるものであろう。なお、両者とも粘土等による粘り床はみられなかった。

ＳＢ01は推定直径7.8ｍの円形住居であり、床面から周溝と柱穴を確認した。柱穴のうち４個は約2.1ｍ間隔であり、主柱穴と考えられる。住居壁面と柱穴のうち、ＳＢ02の埋土上位から掘り込まれたと考えられる部分については確認できず、炉の存在を示す掘り込みや焼土等は発見されなかった。この住居は床面から18㎝前後が残存しているが、北側の壁面沿いから小型の甕（第９図18）が発見されたほかは、住居床面上には遺物は存在しなかったため、この土器によって住居の時期を推定した。

ＳＢ02は直径約7.5ｍの円形住居であり、東側を削り落されている。床面から30㎝前後が残存しており、南西壁面沿いに大型の甕（第９図22）、北側壁面沿いに鉢（第９図23）が遺存した。



第６図　竪穴住居実測図

前者の甕は壁面沿いに横倒しの状態で置かれ、残存壁面高より上になる部分は失われていた（図版第４参照)。床面から検出した柱穴のいくつかは主柱穴と考えられ、全体で５ないし６個と考えられる。周溝は南部にわずかに残るのみであり、床面からは炉および床面の焼け締まりは確認されなかった。

３．溝

溝は弥生時代・中世のものがあり、計７条検出された。このうちＳＤ03・07は近世以降の水田に伴う用排水路であり、他の遺構とは直接の関わりをもたない。ＳＤ05以外は東西・南北の方位を意識したものと考えられる。

ＳＤ01(第７図)は調査区内で最大の溝であり、残存長24.8ｍ・最大幅3.6ｍ・最深部で深さ50㎝余りである。この溝は台地平坦部と背後の山とを分断するように掘り込まれ、南端は調査区外に延びる。この溝は全体として北西から南東に主軸をとるが、蛇行の屈曲と溝底の遺物の堆積状況を考慮するなら、東西方向を意識したものと捉えることができる。溝底は北西から南東に向けてゆるやかに傾斜しており、雨水等がよどむことはない。この溝の東半部では、溝底に拳大から人頭大の石が列状をなして存在しており、部分的には重なりあっていた。この溝の埋土には弥生土器をはじめとする多量の遺物が含まれており、他に翼状剝片・土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・緑釉陶器・製塩土器などを含んでいる。これらの遺物は先土器時代から中世にわたる時期のものであるが、溝底に存在した土器から13～14世紀がこの溝の廃絶時期と考えられる。

ＳＤ02は現時点で５～15㎝の深さをもつ中世の溝である。おそらくは同時期の掘立柱建物に付随するものであろう。ほぼ同様の状況は田部盆地内では小出遺跡・田畑遺跡でも確認されており、中世におけるこの地域の住居に比較的多くみられる傾向のようである。

ＳＤ04は弥生時代中期に属する溝であり、現時点で５～10㎝の深さをもつ。この遺構は複数土壙の重複である可能性もあるが、ここでは溝として扱っておく。

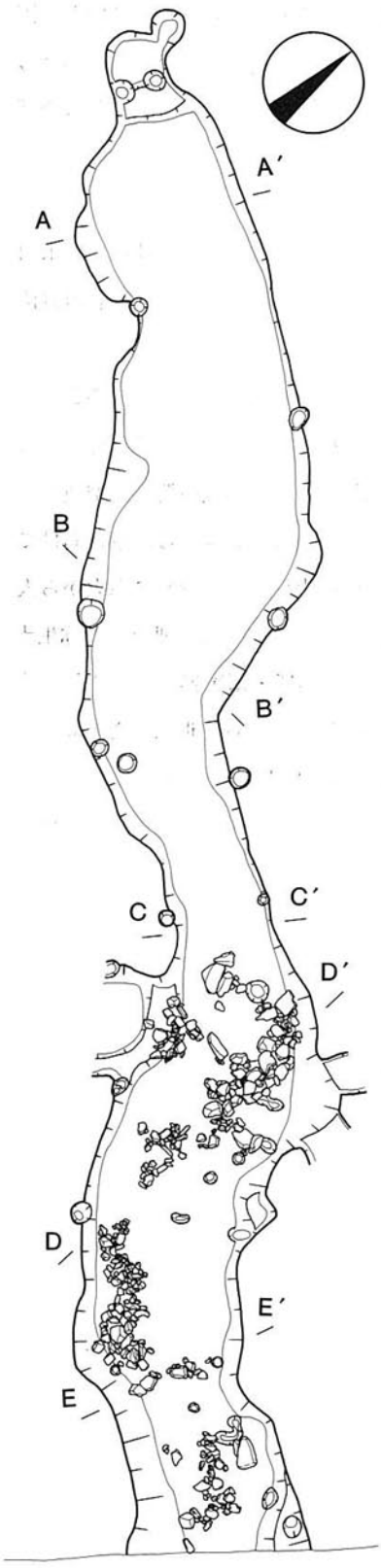
ＳＤ05は現時点で20㎝前後の深さをもつ湾曲した溝であり、外径約４ｍの馬蹄形状をなす。弥生時代前期の土器と太型蛤刃石斧未製品を出土しており、石器製作址の可能性もある。

ＳＤ06は現時点で５㎝前後の深さをもつ浅い溝である。時期不明であるが、ＳＤ02に近接し、これと共通の方向性を示すことから中世の遺構と考えられる。

４．掘立柱建物

掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴は多数存在し、列をなす部分、柱穴のない部分なども確認できる。しかし柱間寸法等から検討した上で、疑いのないかたちで把握できた建物は１棟のみであった。

ＳＢ03（第８図）は東・南に庇をもち、身舎は桁行２間・梁行５間の規模をもつ大型の掘立柱建物である。建物は、直径・深さとも平均30㎝余り柱穴ので構成されており、柱間寸法はほぼ2.1ｍ（７尺）等間である。建物全体の規模は南北12.9ｍ・東西6.4ｍであり、主軸方向は真北に



対しては3°東偏しており、台地の傾斜方向に対してほぼ直交する。建物を構成する柱穴から出土した遺物によって、この建物は14～15世紀に存在したと考えられる。

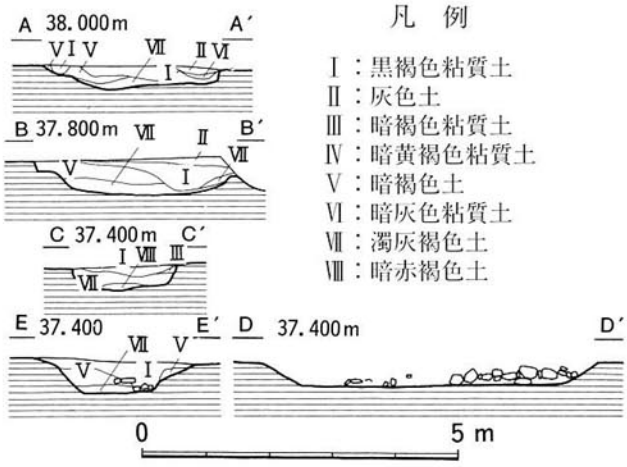
一般的にＳＢ03のような比較的規模の大きい建物が単独で存在することは考えにくく、確認はできなかったものの、いくつかの付随する建物が同時に存在すると考えた方が自然であろう。そして、その多くはＳＢ03に主軸方向をそろえ、または直交させていると推定される。

５．その他の遺構

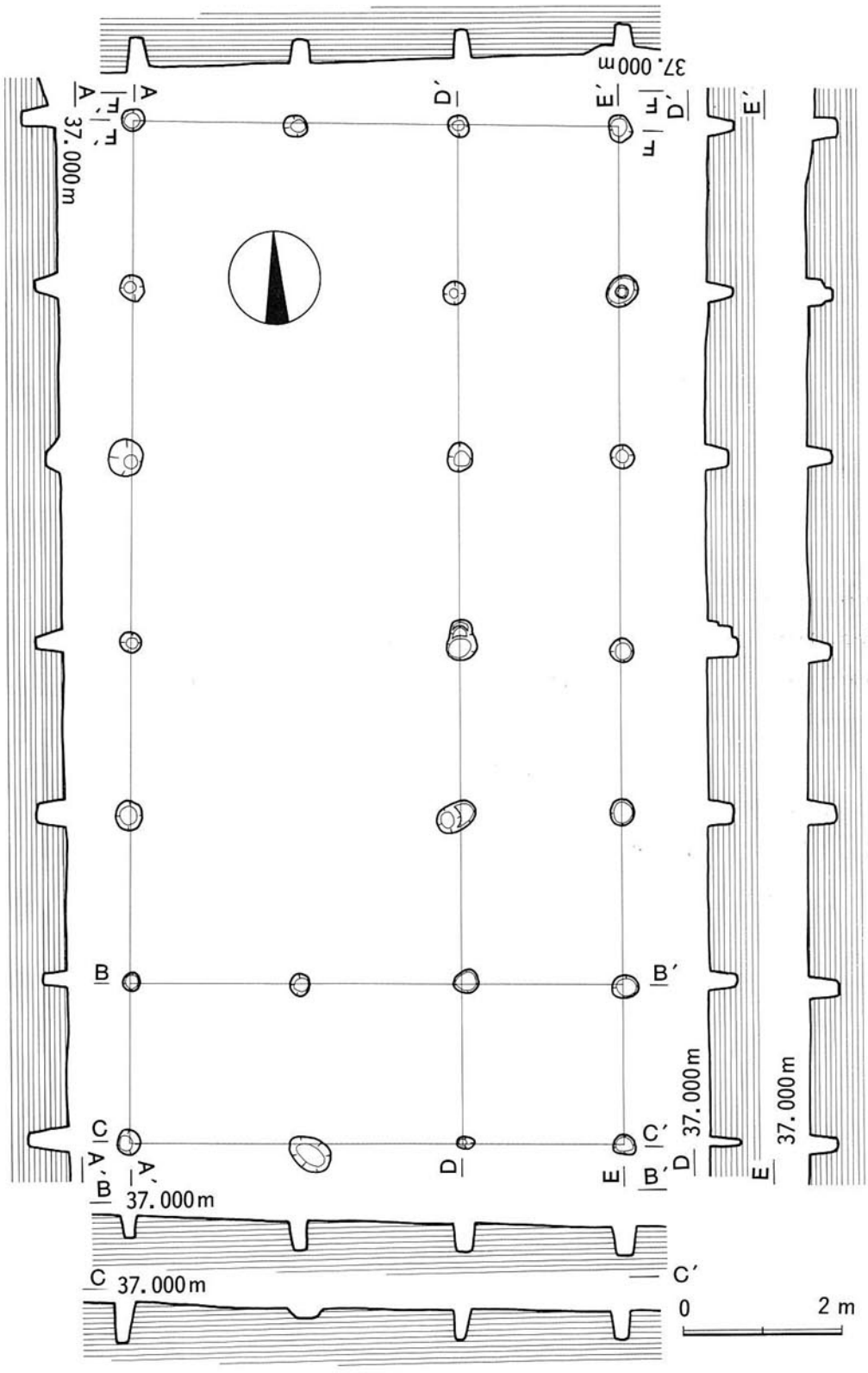
以上の遺構のほかにもいくつか注意すべき遺構が存在する。

散在する柱穴の中には建物を構成するとは考えられないものの、等間隔で直線上に並ぶものがある。これらについては塀あるいは柵の存在を考慮すべきであろう。

また、柱穴として扱っているものの中には、祭祀土壙と考えるべきものも含まれている。ＳＰ02は径37㎝、深さ41㎝の柱穴であるが、埋土中から陶器片30点（第10図34～36ほか）が木炭小片とともに折り重なって出土した。陶器片は備前焼の壺の破片であり、同一個体と考えられ意図的に詰め込まれた状況であった。同様な状況を示す例は、田畑遺跡でも確認されており、この例でも陶器片は炭化物（この例では炭化米）を伴っている。このことからは、中世にこの地域で陶器埋納に特殊な意味を込めていたことは否定できないであろう。



第７図　溝（SD01）実測図



第８図　掘立柱建物（SB03）実測図

Ⅳ 遺　　物

今回の調査で発見された遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・土製品・石製品その他であり、時代的には先土器時代から中世に及ぶ。ほとんどの遺物は遺構の廃絶に伴って投棄された状態で発見され、良好な一括遺物や完全な状態を保った遺物をほとんど含んでいない。このため、ここでは本遺跡から出土した代表的な遺物について概説する。

1．弥生土器（第9図）

量的に最も多く出土したが、ほとんどは小片のため数点の甕を除いては復元可能な個体を含まない。前期末の綾羅木Ⅲ式土器が大半を占め、綾羅木Ⅳ式を中心とする中期のものおよび後期のものを含んでいる。全体的に器表の剝落が著しく、調整技法の不明瞭なものが多い。1～12・19は壺、13～18・20～22は甕、23は鉢である。

1はハケ原体端部または貝殻腹縁とみられる施文具で口縁端部に有軸羽状文を施す。2は口縁端部にハケ原体端部で沈線を施している。5は頚部のほかに肩部にもヘラによって羽状文を施文する。6の木葉文は細いヘラによるものである。13は口縁直下の2か所に貼り付けによる突起をもつ。14は1条の沈線をもつが、器表の剝落により不明瞭である。15・16の口縁端部の刺突はハケ原体の端部によるものであり、19・20の刺突はヘラによるものである。22は丸底気味であり、自立できない。

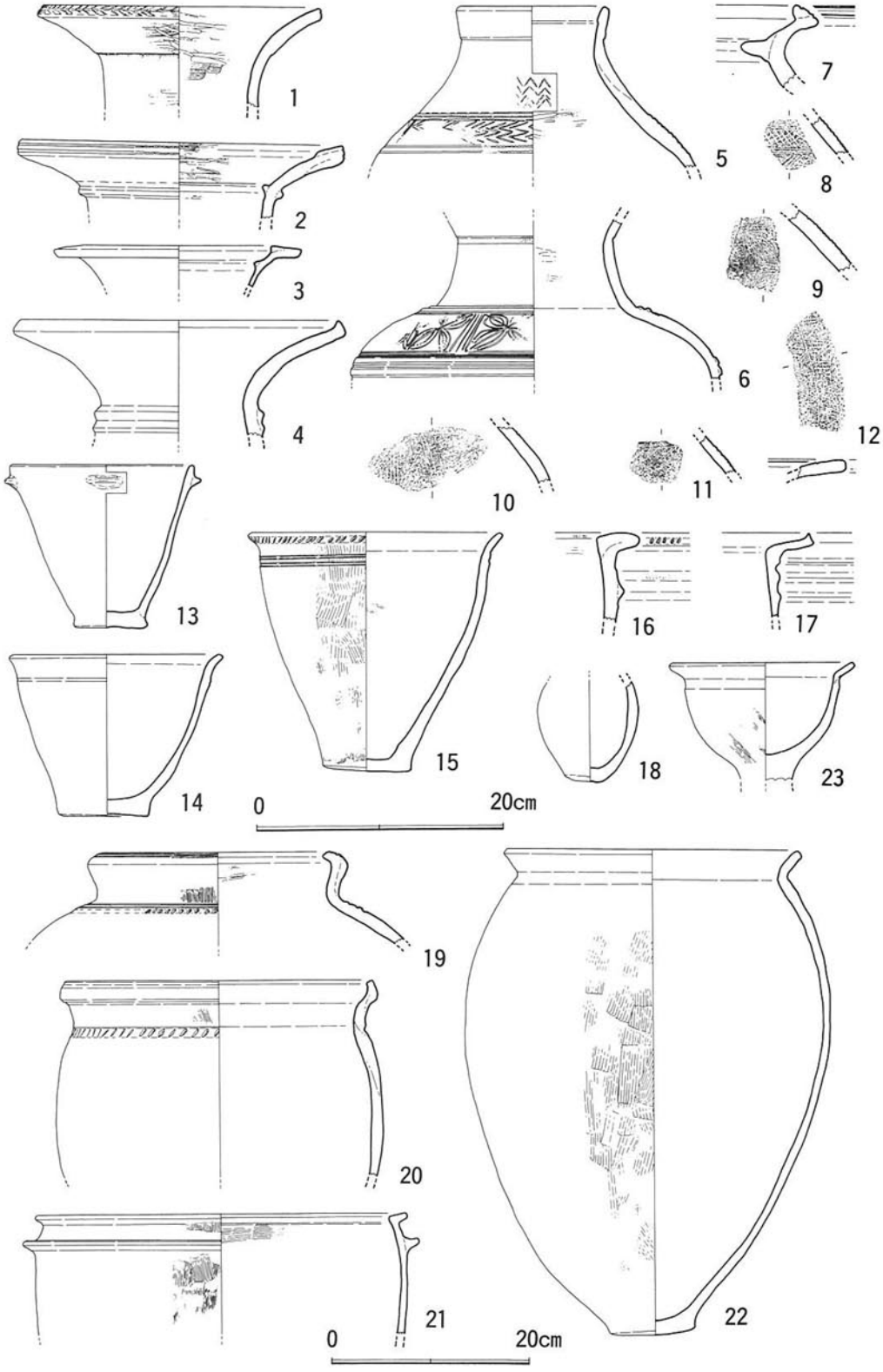
1・8・11はＳＫ50から、6・19・21はＳＫ19から、9・10・12・17はＳＫ49から、14・20はＳＫ29から、18はＳＢ01から、22・23はＳＢ02からの出土である。

2．古代・中世の土器・陶磁器（第10図）

24～28は須恵器であり、杯蓋（24）・杯身（25～27）・壺蓋（28)がある。確認できものについては、切り離しはすべてヘラ切りであり、ロクロはすべて右回転であった。。26は遺物包含層から、他はＳＤ01から出土した。8世紀から9世紀にかけてのものであり、ＳＤ01からは高台をもたない杯も出土している。

土師器は古代から中世にかけての甕（30）・椀・杯（29）・皿・鍋などが出土したが、ここではＳＤ01から出土したものを取り上げた。29は底部に糸切り痕をもつやや小型の杯であり、橙褐色を呈する。30は長胴型の甕であり、丸底の底部片も出土している。内面はナデによって調整する。

31～33は白磁である。31・32は碗であり、ＳＤ01の同一層から出土した。31は見込みの釉を蛇の目状に掻き落す。32は内面に櫛描文を施すが、白濁した釉のために不鮮明である。33はＳＰ06・07より出土した白磁壺片を図上復元したものである。耳の数は不明であるが、おそらく四耳壺であろう。34～36はＳＰ02より出土した無釉の陶器壺である。3点は同一個体と考えられ、口縁の形状等から14世紀の備前焼と考えられる。35・36は焼成前にヘラで文字を彫り込んだ破片であり、



第９図　遺物実測図（1）　弥生土器

36は「能」と読める。

3．石器・石製品（第11～13図）

石器・石製品には、翼状剝片・太型蛤刃石斧未製品・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧未製品・打製石鏃・磨製石鏃・石鎌・砥石・打製石斧・敲石・扁平片刃石斧などがある。

翼状剝片（37～39）は比較的大型の剝片であり、二次調整を受けていない。比較的軟質の石材を使用しているため、表面は風化が著しい。37はＳＤ01、38は遺物包含層、39はＳＫ17から出土しており、いずれも原位置を保っていない。石材はホルンフェルス化した泥岩(37)・凝灰岩(38)・砂岩（39）などであり、いずれも本遺跡周辺で採取可能なものを利用している。

太型蛤刃石斧未製品（40～48ほか）は総数10数点あり、打裂（40・41）・敲打（42～48）の工程で折損したものが多い。未加工の原石も存在しており、製品（49～54）と合わせて一連の工程が復元可能である。太型蛤刃石斧の製品はいずれも使用によって折損しており、完全に遺存した個体はない。このことから、本遺跡は工房を含んでいるものの、基本的には日常生活の場であったことが推定できる。

柱状片刃石斧も未製品（55）が出土している。55を含めて３点出土しており、いずれも打裂の段階で折損したものである。太型蛤刃石斧と同様に、製品は折損品としてのみ遺存する。

太型蛤刃石斧および柱状片刃石斧の未製品・製品の使用石材は砂岩・泥質砂岩・ホルンフェルス化した泥岩・細粒の礫岩など様々であり、本遺跡周辺で採取可能な石材をひろく利用しているようである。40・44はＳＤ05から、43・46・47・52・53・55はＳＤ01から、41はＳＫ49から、42はＳＫ29から、45はＳＫ65から、48は遺物包含層から、49はＳＫ50から、50はＳＫ26から、51はＳＫ66から、54はＳＫ46から出土した。

10数点出土した打製石鏃（56～59ほか）のうち、黒曜石製のものは56の１点のみであった。透明度の高い黒色で、一部に自然面を残す。57は流紋岩質の石材を使用しＳＰ01から、58・59は安山岩製で遺物包含層から出土した。

磨製石鏃は60の１点のみであり、ＳＫ46から出土した。頁岩を研磨したものであり、表面は剝落が著しい。

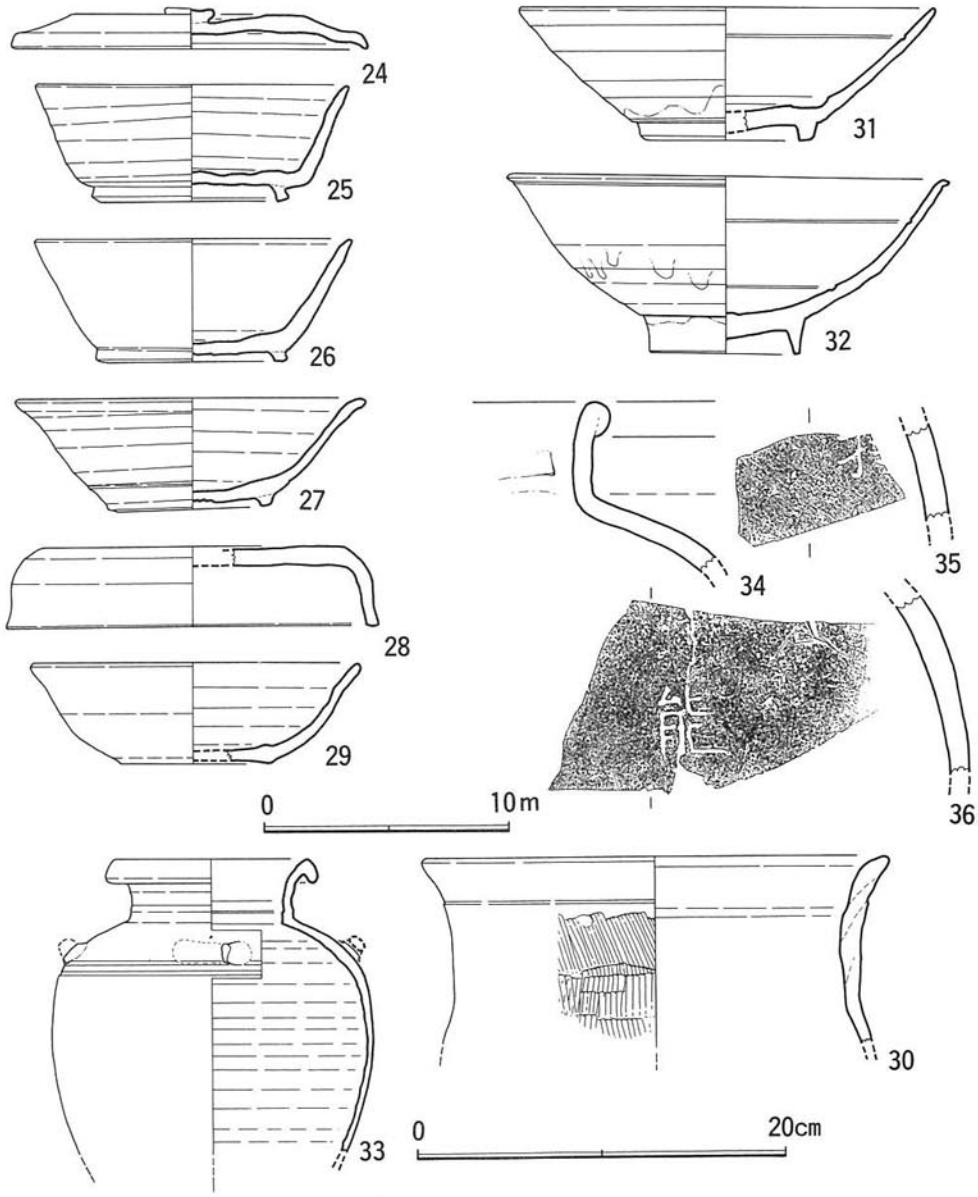
石鎌（61・62）は図示したものの他に折損品２点が出土した。61は製品の折損であるが、62については刃部が研磨されておらず、未製品の可能性もある。石材はいずれも頁岩であり、61はＳＫ49から、62はＳＢ01から出土した。

63は砥石であり、折損する。四角柱状で４面を使用しており、ＳＰ08から出土した。

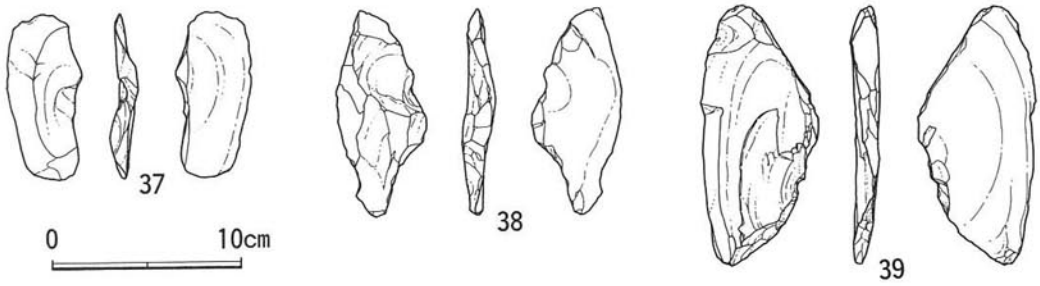
64は打製石斧の折損品であり、遺物包含層から出土した。

65は斑岩の円礫を利用した敲石であり、使用痕が顕著である。ＳＤ01から出土した。

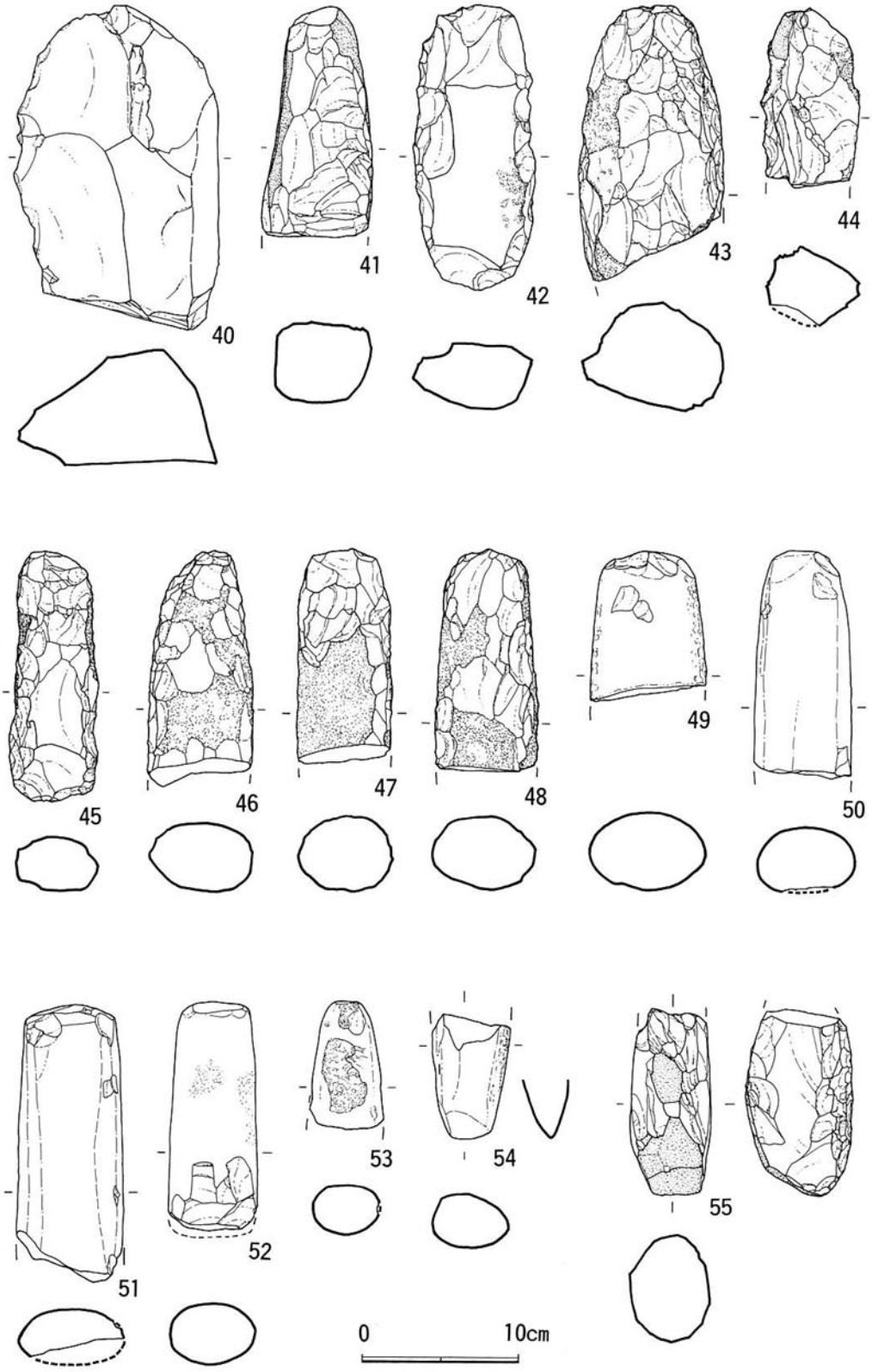
66～68は扁平片刃石斧である。頁岩または泥岩製であり、66はＳＫ48から、67はＳＫ45から、68は遺物包含層から出土した。



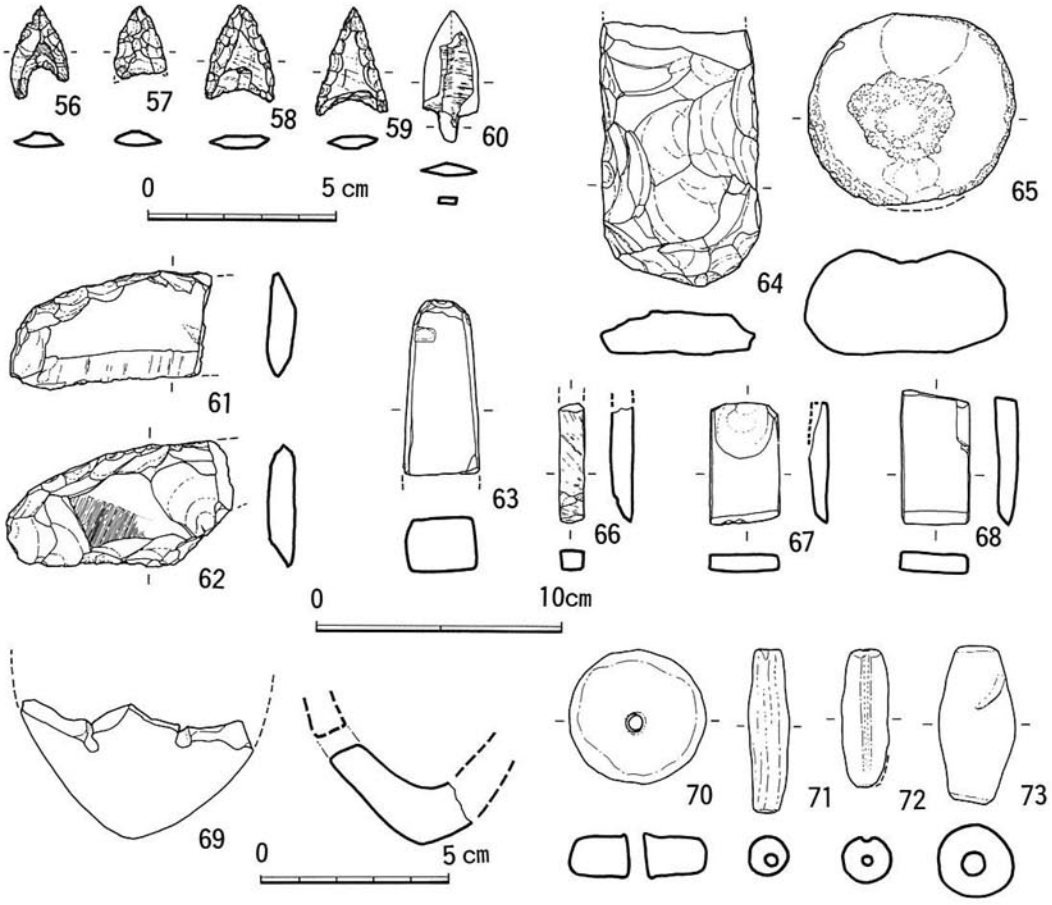
第10図　遺物実測図（2）　須恵器・土師器・陶磁器



第11図　遺物実測図（3）　翼状剥片



第12図　遺物実測図 (4)　石斧・石斧未製品



第13図　遺物実測図（5）　石器・土製品

4．土製品（第13図）

陶塤（69）は１点のみであり、ＳＫ46から出土した。下端から前面下部にかけての破片であり、径４㎜の２孔が残る。全長は７㎝前後、胴部最大径は８㎝前後と推定される。

70は土製の紡錘車である。土器片を転用したものではなく焼成前に片側から穿孔しており、ＳＤ01から出土した。このほかに、石製紡錘車片もＳＫ46から出土している。

71～73は管状の土錘である。72は側面縦方行に１条の溝をもつ。71は遺物包含層から、72はＳＫ49から、73はＳＤ01から出土した。

5．その他の遺物

以上の遺物のほかに図化はできないものの、緑釉陶器・製塩土器などいくつかの注目すべき遺物がある。

緑釉陶器はＳＤ01から出土した１点のみであり、椀ないしは皿の一部である。緑釉陶器は一般の農村集落にはそぐわないものであり、本遺跡の性格を考える上で重要である。

製塩土器はＳＤ01から２点出土した。内面に布圧痕を残す、いわゆる六連島式土器と呼ばれるものである。この種の土器は出土遺跡が限られており、豊浦郡内では初めて確認された。

V まとめ

山ノ口遺跡は山口県豊浦郡菊川町大字吉賀字山ノ口に所在する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。今回の調査は台地上にある集落遺跡のほぼ東半部分を対象にしたものであり、遺跡の全体像を明らかにすることはできなかった。しかし、遺跡の所属時期とその性格については、ほぼ把握することができた。以下に、今回の調査によって得られた成果のいくつかを紹介してまとめとしたい。

今回の調査の成果で注目されるものに弥生時代の石斧未製品がある。確実な工房は発見できないが、石斧のような大型石器は石材の移動が想定されないこと、遺跡周辺で採取可能な石材を用いていることなどから、この地点で石斧が製作されていたことは確実である。ほとんどは太型蛤刃石斧の未製品であり、打裂・敲打の各段階の折損品がある。同様のことはすでに本遺跡の東方２㎞にある下七見遺跡でも確認されており、田部盆地南部を一連の石斧製作地帯としてとらえる必要がありそうである。

次に注目されるのが中世の大型建物の存在である。柱穴の規模は小さいものの、２面に庇をもち東西12ｍを超える規模の建物は、同時期の盆地内には例を見ない。日照時間が短く、氾濫原に近いという本遺跡の立地条件を考慮に入れるならば、この建物の占地は意図的なものと考えざるを得ない。

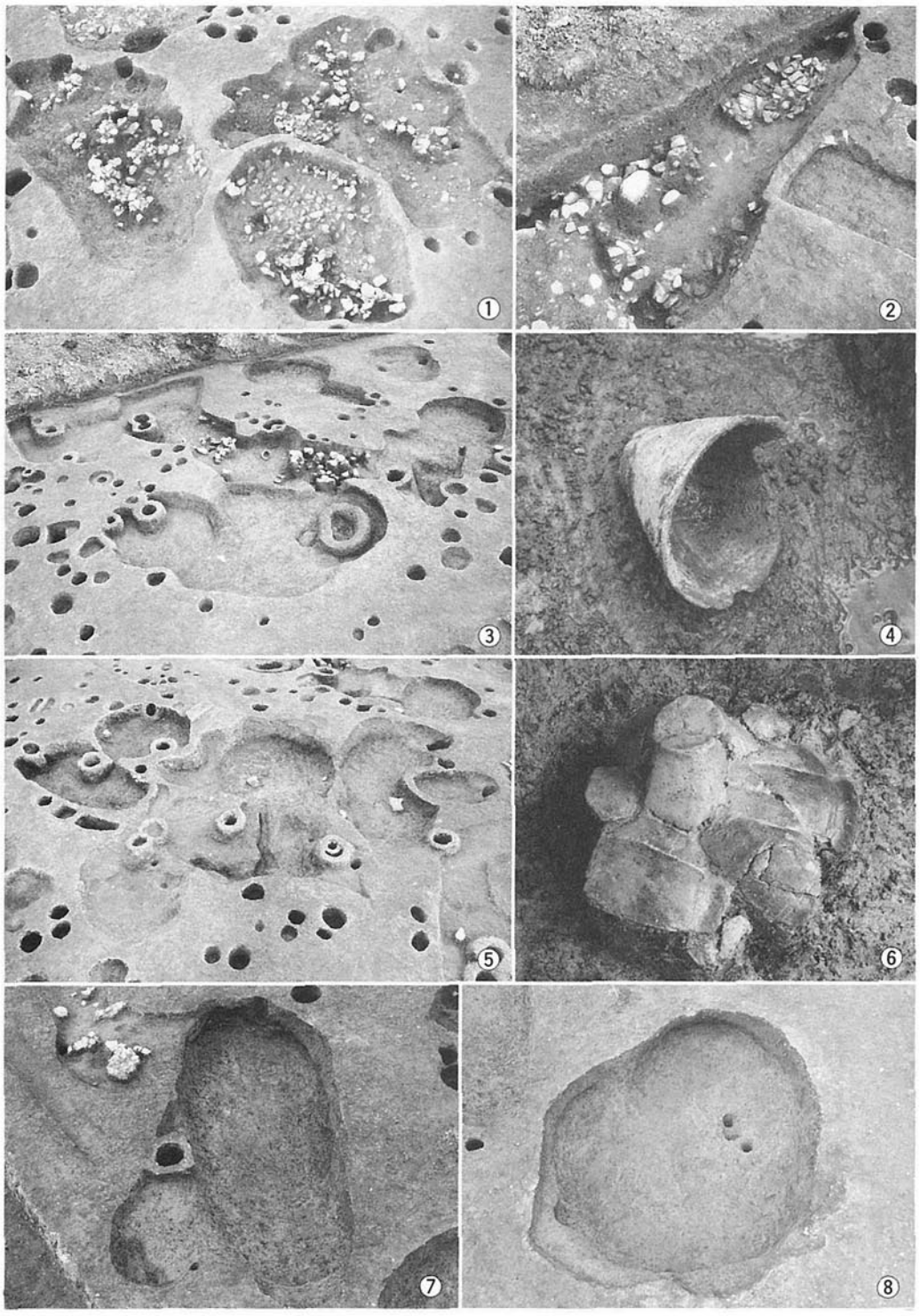
このほか先土器時代の翼状剝片、弥生時代の陶塤なども注目すべき発見である。翼状剝片は山口県内においてはその存在が想定されながら確実な発見例がなく、今回の発見で空白を埋めることになった。ナイフ型石器や同時期の遺構は発見されなかったものの、先土器時代遺跡が周辺に存在する可能性は高い。陶塤は綾羅木郷遺跡（下関市）の６例、下七見遺跡（菊川町）の１例、大門遺跡（豊浦町）の１例に次ぐ、山口県で９例目の出土である。

今回の調査によって提起される問題は、盆地の片隅であり、安定した広い耕地に隣接しない本遺跡に比較的有力な集落が存在し続けたことの必然性であろう。この点に関しては、この地点のもつ交通上の意味を最も重要視すべきであろう。

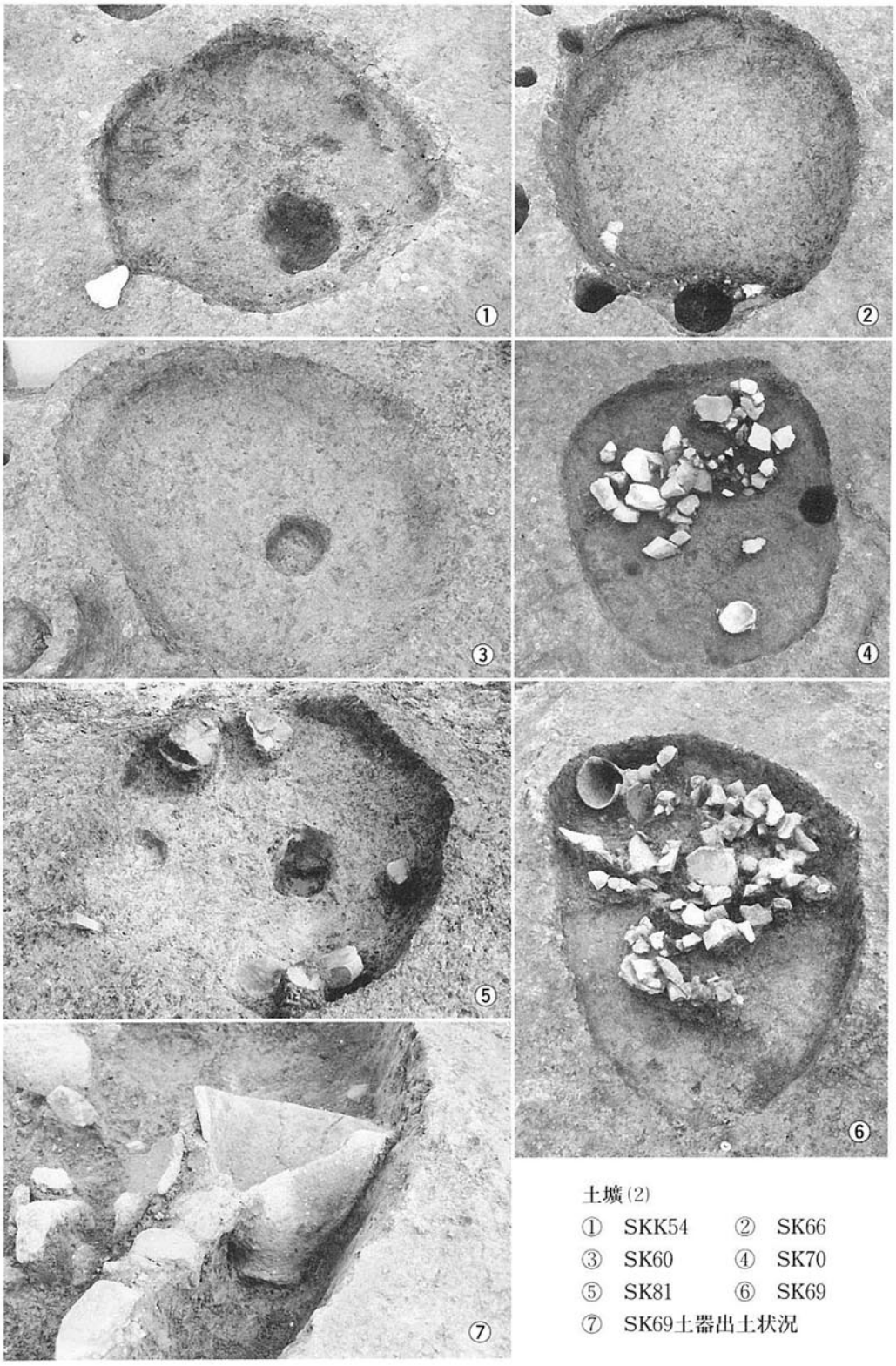
弥生時代を例にとるなら、交易を目的とした石器生産は前期末～中期における遺跡の激増を背景として開始されたと考えられており、この場合には綾羅木川流域（下関市）や黒井川・川棚川流域（豊浦町）など当時の人口密集地域が強く意識されていたはずである。本遺跡のある田部盆地は両地域と10㎞前後の距離にあり、製品を搬出する上でも有利な位置にある。また、陶塤を出土する遺跡がこれらの地域（半径６㎞程度）に集中することも、その結び付きの強さを示しているかのようである。しかし本遺跡のもつ意味については、さらに地理的・経済的・政治的把握が不可欠であり、即断するには時期尚早であろう。今後の資料の増加を待ちたい。

① 遺跡遠景（写真中央の山裾　北東から）　②遺跡全景

図版 第2



土壙(1)
①SK16～18　②SK19　③SK27～38　④SK29土器出土状況　⑤SK39～47　⑥SK45土器出土状況
⑦SK50・51　⑧SK49



土壙(2)

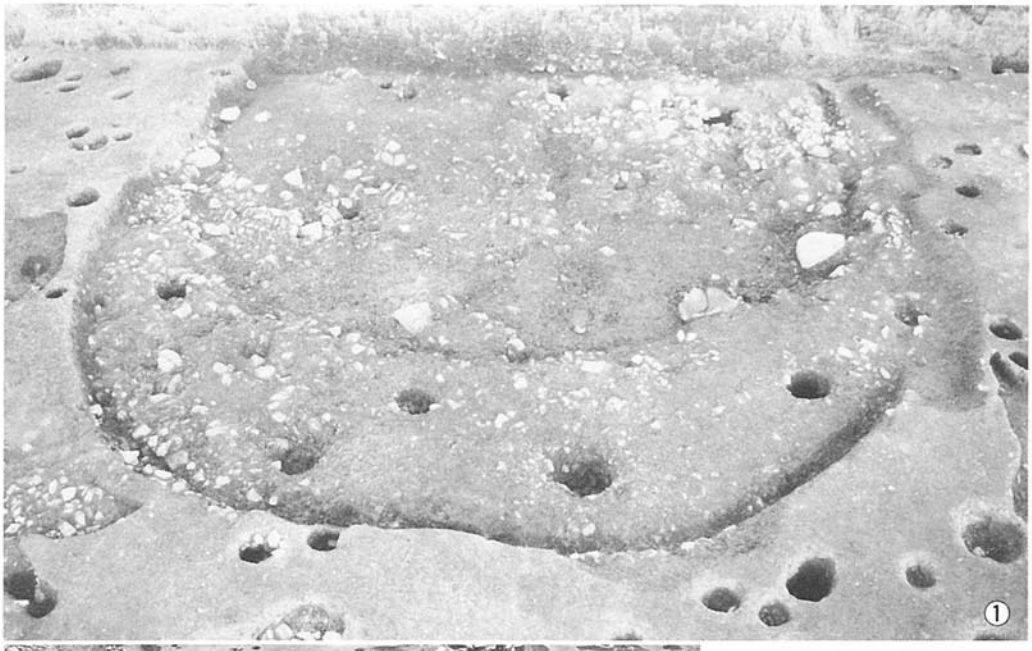
① SKK54　② SK66

③ SK60　④ SK70

⑤ SK81　⑥ SK69

⑦ SK69土器出土状況

図版 第4

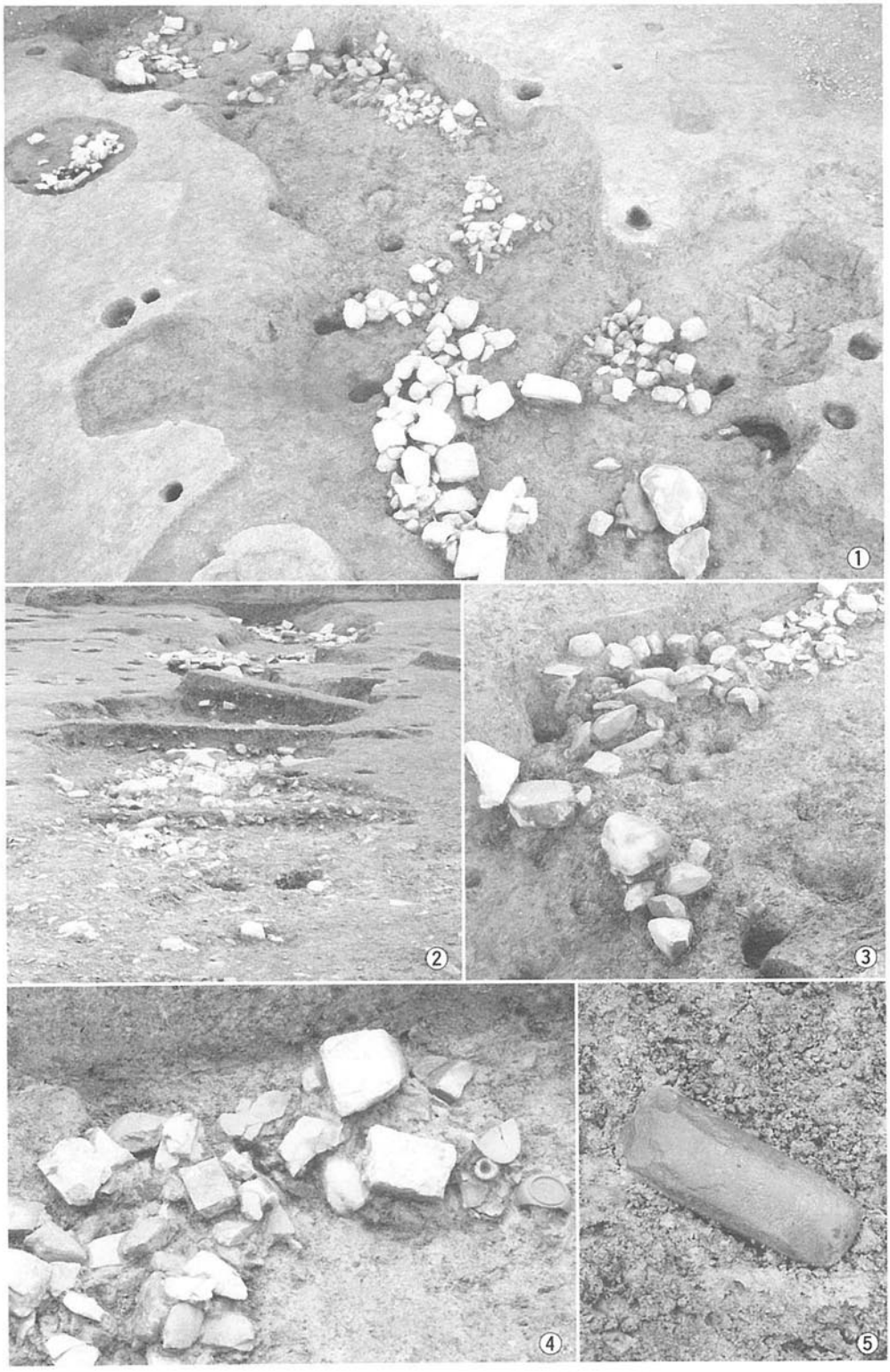


竪穴住居

① SB01・02全景
（西から）

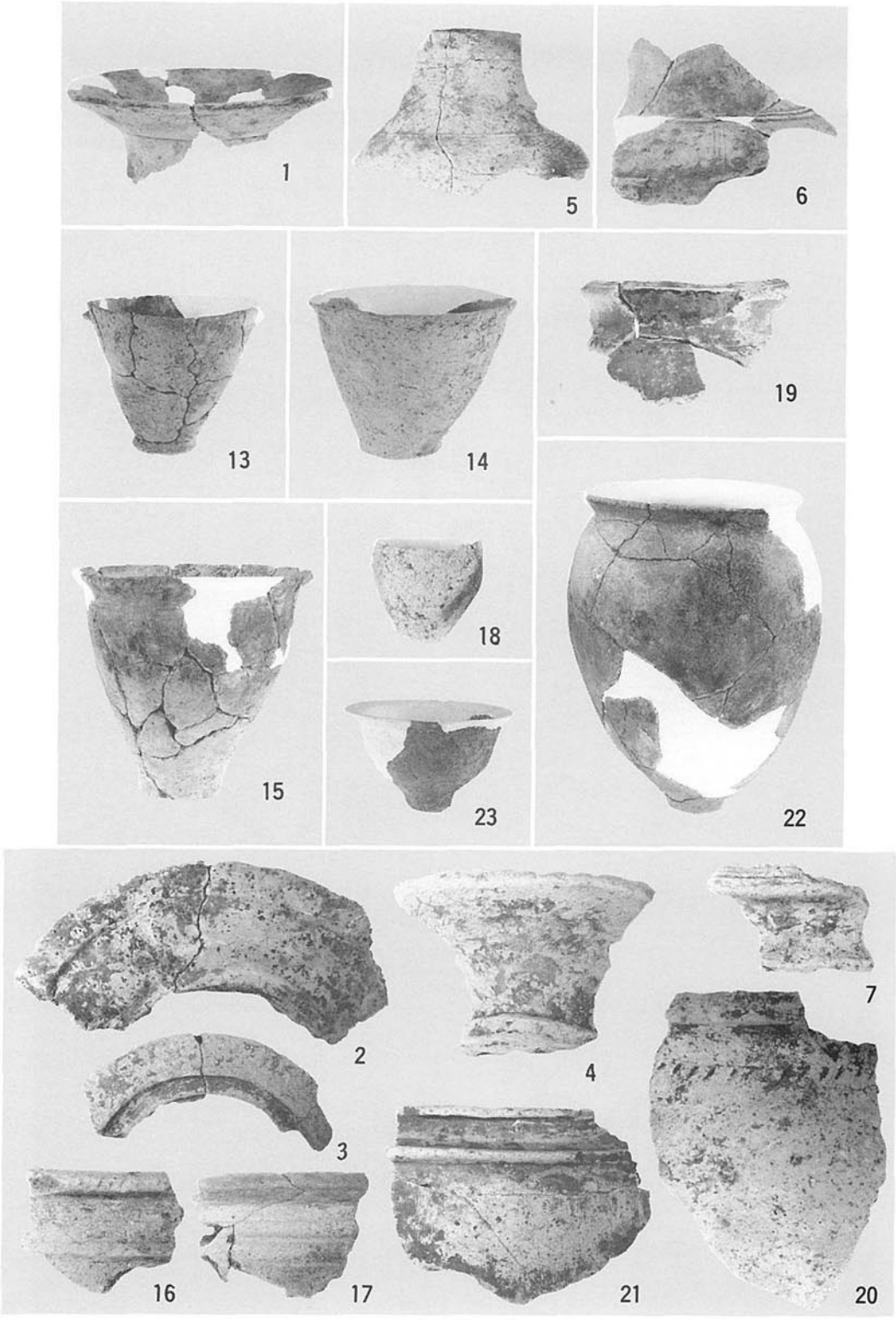
② SB01・02全景
（北から）

③・④SB02土器出土状況

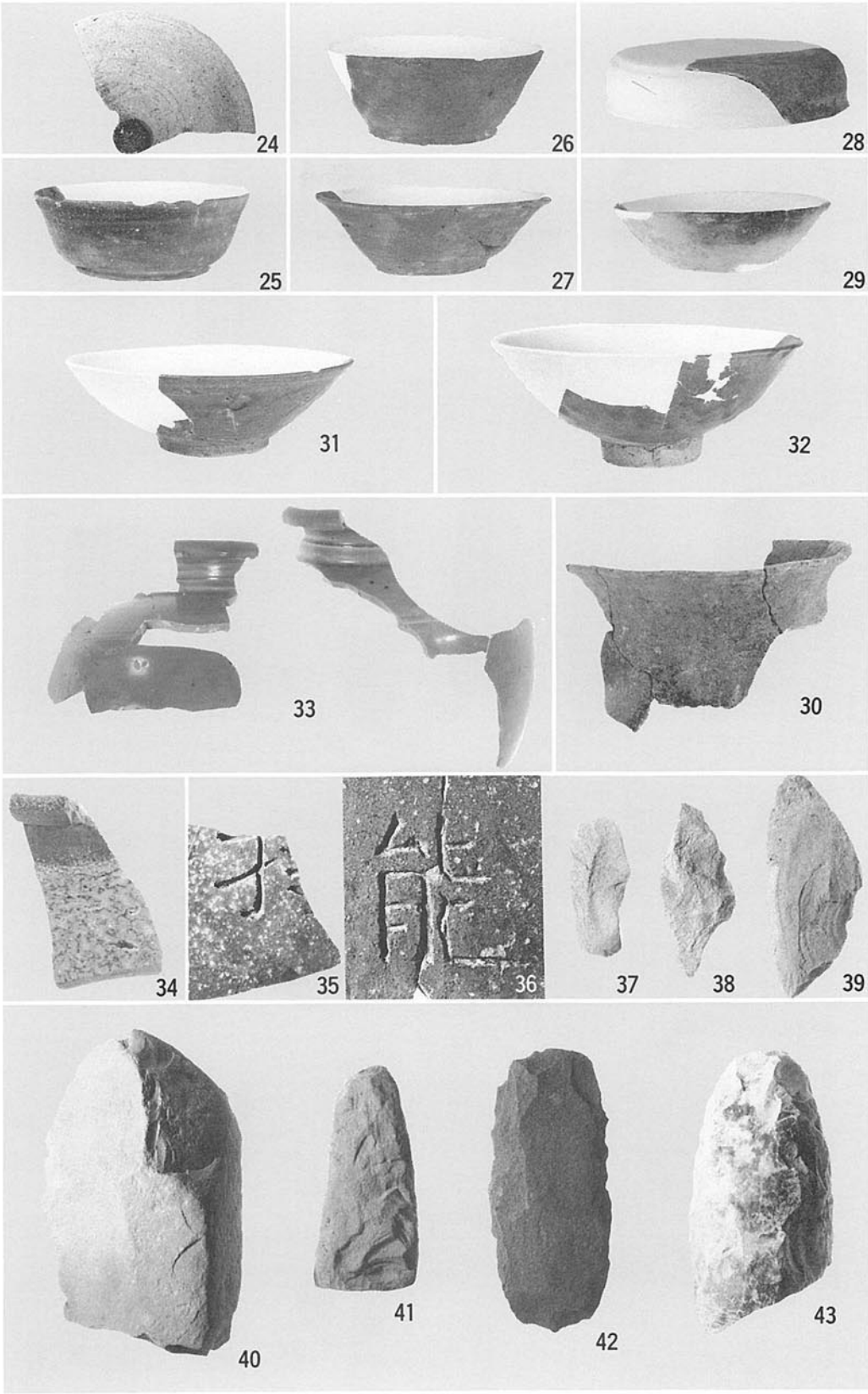


SD01　①　東半部　②全景（北西から）　③・④　礫群　⑤　石斧出土状況

図版 第6

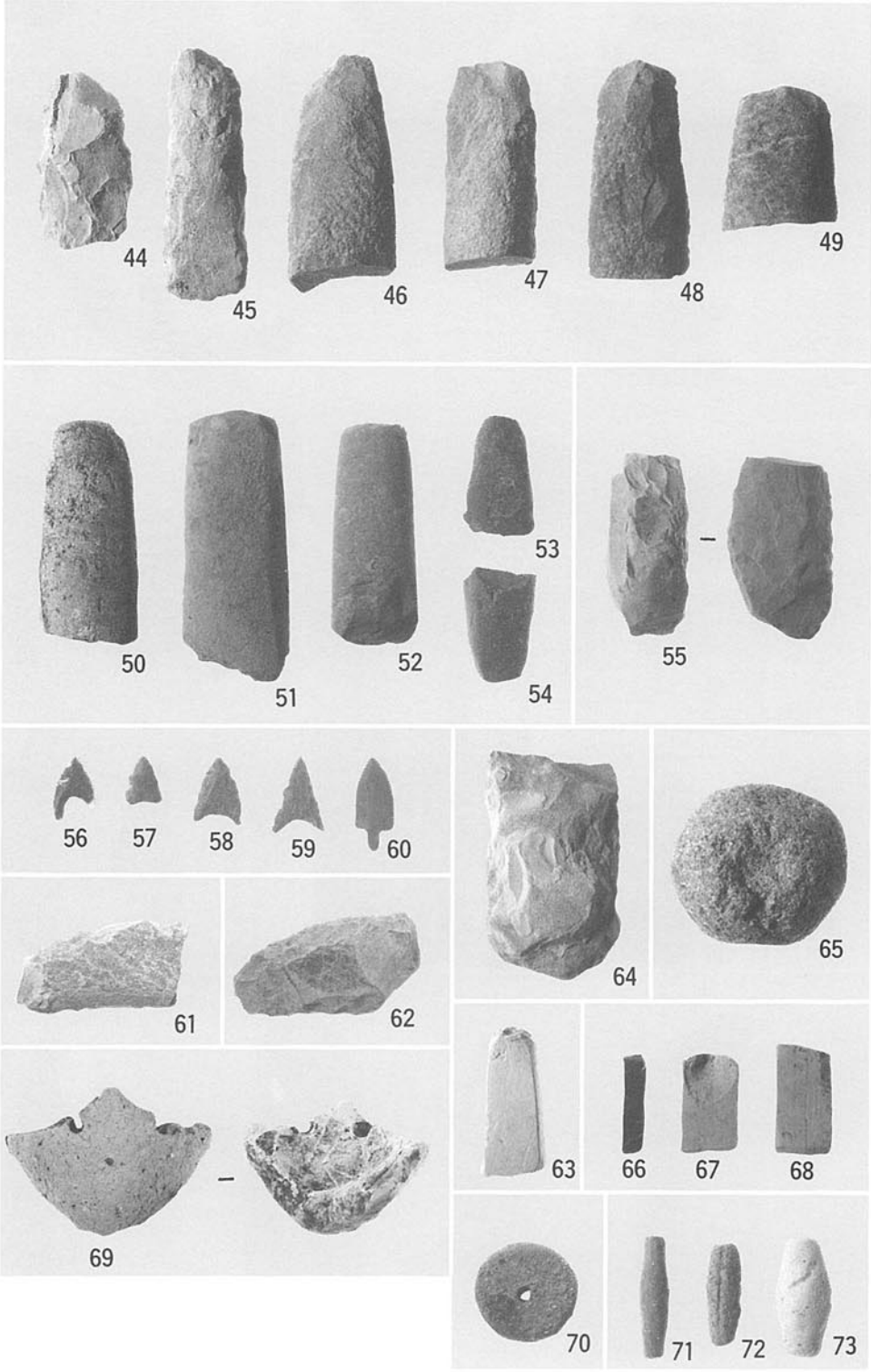


遺　物 (1)



遺　物 (2)

図版 第 8


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

遺　物 (3)

山口県埋蔵文化財調査報告　第140集

山ノ口遺跡

―― 平成２年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告 ――

平成３年２月

編集　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町2130）

山口県教育委員会文化課
（山口市滝町１－１）

山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町３－22）

発行　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町2130）

山口県教育委員会
（山口市滝町１－１）

印刷　株式会社　マルニ
（山口市道祖町７－13）